

自他の身体に関する知識と社会変革：当事者研究と共同創造

綾屋 紗月
Satsuki Ayaya

東京大学
Tokyo University

1980年代以降、障害に関する考え方は、障害をもつ人々を多数派に近づける医学モデル (medical model) から、可変性に限界のある個人の心身機能 (impairment) やその変化にかかるコストを考慮に入れながら、多様な個性を包摂する社会環境のデザインを実現する社会モデル (social model) に取って代わった。その結果、個人に介入を行う医学的アプローチと、社会環境を少数派にとっても使いやすいように改変するバリアフリー・アプローチの合理的な組み合わせが推奨されるようになった。近年は、ASD 領域においても当事者視点と社会モデルを踏まえた研究が徐々に現れている。例えば ASD は矯正すべき疾病ではなく自然な認知神経的バリエーションだとする神経多様性 (neurodiversity) と呼ばれる当事者発の視点がアカデミアにも広まりつつある。

しかし、可視性の高い身体障害などの多様性に比べ、ASD と括られる人々の多様性は、自他から認識困難な場合が多く、社会変革に先立って自分の身体を定型発達者との比較において把握する作業が必要である。発表者は 2006 年から、社会環境が変動してもほとんど変化しない自己の不変項について、当事者研究という日本独自のアプローチによって探求し (綾屋・熊谷, 2008)、そこで得られた仮説をもとに、基礎研究者と協働して、ボディイメージが不安定であること (Asada et al., 2017)、パーソナルスペースが狭いこと (Asada et al., 2016)、触覚刺激に対する自律神経反応が大きいこと (Fukuyama et al., 2017)、声の制御においてフィードバックの予測誤差に敏感で、内部モデルに基づくフィードフォワード制御が弱いこと (Lin et al., 2015)、顔認知における視線のスキャンパターンがランダムな傾向にあること (Kato et al., 2015) など実験的に検証してきた。

更に 2011 年以降は、当事者研究の知見を活かして、ASD 者にとってアクセシブルなコミュニケーション様式や社会環境 (autistic sociality) の具体的条件を探求し始めている。例えば、ASD 者の語りやすさを追求した独自のファシリテーション技法を開発し、発達障害者を中心とした当事者研究会を立ち上げ継続している。

研究会は毎回音源を記録しており、多くのナラティブが集積されている。更に社会的障壁を特定するためのナラティブの活用事例の一つとして、「定型発達者のここが不思議」という内容を抽出し、多分野の研究者と協働して少数派視点で多数派を研究する「ソーシャル・マジョリティ研究」を行ってきた (綾屋, 2018)。

本発表では、障害の社会モデルに基づく ASD 研究の方向性として、1) 自己に帰属される可変性の低い impairment の特定と、2) 社会的障壁の特定と除去という 2 つの重要性を確認し、それを進めていく枠組みとしての当事者研究や共同創造の重要性を主張する。